

このたびの熊本地震並びに千葉豪雨により被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げます。

現在会員登録数 4,745 人さま。次号は 9 月 25 日発行の予定です／

＋-----◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----＋

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

《5》宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

《6》富安陽子 I I C L O ストーリーコンペ 第3回

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

■-----■

【1】お知らせ

■-----■

●「おはなしモノレール」参加申込受付中

大阪モノレール「万博記念公園駅」から「彩都西駅」まで、貸切モノレールに乗って絵本やおはなしを楽しみ、彩都の会場で人形劇を観るイベントです。

◇開催日：10月4日（日）

Aコース＝12：25～14：25、Bコース＝13：35～15：35

◇対象：5歳～小学3年生（保護者同伴） ◇定員：240人

◇参加費：一人500円（子ども・大人同額）

◇申込締切：9月14日（月）＜定員を超えた場合は抽選します＞

※詳細、お申し込みは↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/01_kids/index.html#ohanashimonorail

●「ご寄付をお願いします」 当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html

※Syncable（シンカブル）＝継続寄付（毎年／毎月）、単発寄付が選べます。

→ <https://syncable.biz/associate/19800701>

■-----■

【2】コラム

■-----■

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Noriko's Talk

『もりもりの出版社』 まはら三桃、工藤純子、廣嶋玲子、菅野雪虫、濱野京子/著 講談社 2026年7月 対象年齢：小学校高学年以上

*今回のゲストは日中児童文学研究者の浅野法子さん（N）です。

概要：小学5年生の5人が、総合出版社と言われる森々館（しんしんかん）へ会社見学に行き、それぞれが体験したことを章ごとに異なる5人の視点で5人の作家が描く連作集。建築士になりたくて森々館の旧館に興味のあるユリア（「みえるものしか信じない」）、マンガ家志望の陽向（ひなた）（「マンガの神さま」）、「たりい」が口癖の真吾（「監禁部屋は開けるべからず」）、体育会用のうちわにクラスで嫌いな子の顔を描くように依頼されて困っている本好きの夕風（ゆうな）（「嫌いだからね」）、編集長をめざす心春（こはる）（「本当の願い」）の5人が登場する。見学では、アニメの主人公のコスプレの男性と、白いロングのワンピース姿のお姉さんに案内してもらい、時に不思議な世界に迷いこんで、それぞれ自分自身について新しい発見をする。

N：5人の作家によって書かれているのに、同じ場所、共通する登場人物がでてきて、ひとまとまりのお話になっているのに驚きました。

Y：出版社への会社見学が題材になっており、この本を通して総合出版社の様子、本がどのようにして創られるかがわかるところも興味深かったです。森々館のモデルは講談社かなと思いながら読みました。『あしたのジョー』（高盛朝雄/原作、ちばてつや/漫画）や『ブルーロック』（金城宗幸/原作ノ村優介/漫画）を思わせる作品なども出てきましたね。

N：5つのストーリーには会社見学に参加した5人の人物がそれぞれ主人公になっていて、それぞれが出版社見学を通して自分の中にある課題を解決するという展開も読み応えがありました。そして、ただ、出版社内のことだけで終わるのではなく、会社見学のあとの運動会が描かれていたり、下の階に降りていくとタイムスリップしていたりするのもおもしろかったです。

Y：どの作品がいちばん印象に残りましたか。

N：どれもおもしろかったのですが、やる気のない真吾が、昭和にタイムスリップして、会社内の監禁部屋で推理小説を書く作家に出会う「監禁部屋は開けるべからず」（廣嶋玲子）でしょうか。

Y：私は、自分のマンガがすばらしいと信じて、無理矢理持ち込みをしようとして、社員食堂の花子さんに言われて自分の作品のつまらなさに気づく「マンガの神さま」（工藤純子）が印象に残りました。いかにも小学5年生ぐらいの子どもの思い込みの激しさが描かれている点と、友だち関係が織り込まれている点がおもしろかったです。

N：どの子も周りにいそうだなとも思いました。

ところで、この作品は、2006年にデビューした同じ5人の作家が書いた連作集のシリーズの5冊目です。デビュー20周年とのことで、ベテランの筆の力を感じました。

Y：『ぐるぐるの図書室』（2016年10月）、『ぎりぎりの本屋さん』（2018年10月）、『じりじりの移動図書館』（2020年7月）、『くらくらのブックカフェ』（2024年9月、すべて講談社）ですね。シリーズで気になった本はありましたか。

N：異次元へ行ったり、過去や未来に行ったりするなど、移動図書館であることがうまく使われたストーリーがおもしろかった『じりじりの移動図書館』が特に印象に残りました。

Y：ますます筆ののっている作家のみなさんに、ぜひ、次作も期待したいです。本にまつわる連作集、次は一箱本棚？ 家庭文庫？ ブックバー？ 古書店？と期待がふくらみます。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第131回 「種山ヶ原の夜」

方言の劇を生きる

宮沢賢治がのこした4編の戯曲の一つです。1924（大正13）年8月に花巻農学校の生徒を指導、演出して上演されたといえます。種山ヶ原は、北上山地南西部に広がる放牧地です。

幕が開くと、舞台は、まだ真っ暗な夜。中央に草小屋があり、伊藤奎一と日雇草刈一、二が小さな焚火をかこんでいます。牧草地見廻人は、ねむっています。つぎが劇のはじまりです。

〈伊藤、（^{しば}暫らく遠い風の音を聞いた後）

「^{まだ}又少し風の^{むぎ}方向あ、変わったようだな。晴れるべが。」

日雇一「なあに、あでにならないだんす。夜明け近ぐづもな、風もぶらぶらど行ったり来たりするもんだもす。」

伊藤「とにかくずいぶん寒ぐなた。」

日雇二「した、^は霽れるがもしれないじゃい。斯う寒ぐなて、風も西に変われば。」〉

（ルビ原文）

やがて、見廻人たちは、風の音にまじって馬の声が聞こえる、馬が迷っているといって、そこを出ていってしまいます。——「草刈二（見廻人を起こす）「じゃ、起ぎろ、馬居だ、起ぎろ。」

ねむそうで、「ばるこく ばららげ ぶらんど／ぶらんどぶらんど……」とふしぎな歌をうたっていた伊藤は、ひとりのこって、夢のなかで林務官と「笹戸のどご」の払い下げの話をし、檜や樺や柏の樹の霊とも交流します。樹の霊たちは神楽のようにうたい、伊藤に笹戸を払い下げしたら「一本も木伐らないてよ」と約束させようとします。宮津博が「賢治の戯曲の妙味」としたことですが、「現実世界と夢幻世界の混交」が自然に行われます（宮津「賢治の四篇の戯曲」1958年）。

このほかの三つの戯曲「飢餓陣営」「ポランの広場」「植物医師」とちがって、「種山ヶ原の夜」は、全編方言の会話で展開します。富田博之は、「かなり徹底した方言の劇」としました（富田『賢治と南吉の演劇世界』1991年）。日本語表記の体系は共通語に見合ったもので、方言は、本来、文字をもたない「声の文化」です。それでも、賢治は、ルビなども駆使して、方言で書いていきます。方言といいましたが、ここに記されているのは、賢治や花巻農学校の生徒たちにとっては「母語」にほかなりません。それぞれの役を演ずる生徒たちは、文字のむこうから「母語」の声を聞き取り、身についたことばで劇を生きたことでしょう。（馬車別当）

（本文の引用は、筑摩書房版『宮沢賢治コレクション2 注文の多い料理店』によりました。）

《3》子どもの本の珠玉のことば 86

「未央、つかんで！」

葉月は、夢中で目の前にゆれている、光るくらげの足をつかんだ。一瞬遅れ

て、未央もつかむ。

くらげの頭が、光りながらパッと開いた。落下傘のようになって、ゆっくりと宙をただよう。葉月と未央は、くらげの足にしがみついた。そのまま、ゆらゆらと舞い続ける。

「……よく、思いついたね」

未央が、恐る恐る声を出した。

「これも、本に書いてあったよ。思い出すのがぎりぎりで……ごめん」

「そういえば、本屋さんの子ども、『ぎりぎり』って言ってたね」

言われて、あの不思議な男の子のことを思い出した。

(工藤純子「思い出のかみかくし」 『ぎりぎりの本屋さん』まはら三桃、菅野雪虫、濱野京子、工藤純子、廣嶋玲子/著 講談社 2018年10月 p.158)

対談で紹介した5人の作家の本にまつわる連作集シリーズの2冊目からの引用です。この本は、小さな町の小さな商店街を抜けて路地に入ったところにある小さな本屋さんが舞台になっています。小学5年生の子どもたちが本屋さんで、やはり小学5年生ぐらいの青いエプロンを着けた店主に出会い、不思議な体験をします。

「思い出のかみかくし」は、主人公の葉月がクラスでキラキラしている梨花のグループに声をかけられて、親友だった未央とぎくしゃくしてしまう様子を描いています。葉月は、本屋さんで子どもの頃に好きだった『思い出のかみかくし』という本を見つけます。初めて見たときは買わず、2回目に買おうと思ったら未央が買ったことを知り、追いかけたところで、二人は、洞窟のようなところで、『思い出のかみかくし』の作品世界へと迷い込みます。葉月が本の内容を一所懸命思い出す中、妖怪みたいで、忘れられた思い出をうばうかくし神が追いかけてきます。

引用は、葉月がかくし神につかまる「ぎりぎり」前に、本の内容を思い出し、二人でくらげをつかんだところです。そこから、二人は、かくし神のすみかへたどりつき、そこで、『思い出のかみかくし』の本を見つけ、二人で協力して何とか本を取り戻し、元の世界へ戻ります。そして、友情関係を確かめ合いますが、そこには、別れが待っていました。ここで、本の内容を知らない未央がなぜ、『思い出のかみかくし』を買おうとしたのかの理由も明らかになります。作品全体から、友だちとはどういう存在かを考えさせてくれます。

もともとこの本全体が「ぎりぎり」をテーマにしており、書店の名前の看板もかすれていて「ぎりぎり」と読めそうだという言葉遊びの要素がありますが、ほかにも、「紙かくし」と「神かくし」などの同じ要素がある点も興味深いと思いました。改めて読み直して、『もりもりの出版社』同様、同じ舞台や重なる人物が登場しながら、多様な世界が描かれる楽しいアンソロジーを楽しみました。(Y)

《4》 行って来ました！

姫路文学館で9月6日まで開催されている「西巻茅子 ラララン ロロロン すてきな げんがてん」に行ってきました。絵本8作品を対象に、リトグラフ、水彩、刺繍など多彩な手法で描かれた原画やラフスケッチが展示されていました。3会場に分かれており、第1会場の対象作品は、『はけたよはけたよ』(神沢利子/文 偕成社 1970年12月)、『わたしのワンピース』(こぐま社 1969年12月)、『ちいさなきいろいかさ』(もりひさし/シナリオ 金の星社 1971年2月)で、第2会場には「わたしもワンピース」としてうさぎの顔は

めパネルが設置されており、第3会場の対象作品は、『ボタンのくに』（なかむらしげお/文 こぐま社 1967年8月）、『ちいさな星の子と山ねこ』（こぐま社 1987年6月）、『あいうえおはよう』（こぐま社 2003年）、『ぞうさん』（まどみちお/詩 こぐま社 2016年3月）、『えのすきなねこさん』（童心社 1986年2月）でした。

西巻茅子は、1939年生まれで、東京芸術大学卒業後、「子どものアトリエ」を開き、子どもに美術を教えていました。リトグラフを学んで賞をもらったことをきっかけに、リトグラフの作品である『ボタンのくに』が出版されました。展示されていた原画は、色合いが美しく、刷っている工程の動画や『ボタンのくに』のジオラマもあって興味深かったです。

今も子どもに大人気で、大きく紹介されていたのが3作目の絵本『わたしのワンピース』でした。解説に、言葉にたよらず「絵がおはなしを語る」新しいスタイルの絵本をつくりたいという思いで作られたとあるように、ワンピースの模様が背景の変化とともに次々に変わる繰り返しが視覚的に楽しく、それを、「ララン ロロン」というリズムカルな言葉が支えているように感じました。

『はけたよはけたよ』は、原画で見るとアクリルとクレヨンで描かれており、パンツがうまくはけないまま外に出たつくんと出会った動物たちにしっかりと存在がありながらも、デフォルメされていることで、ユーモラスで子どもが信じられる世界になっています。

手に取れる本もたくさんあり、あらためて、西巻茅子ワールドを堪能しました。一見、子どもが描くような絵に見えながら、確かなデッサン力と、子どもが親しめる線で描かれた省略や誇張があるからこそ、私の子ども時代から今までずっと愛されてきたんだなと思いました。（K）

姫路文学館 <https://www.himejibungakukan.jp/>

《5》 宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

第7章 天沢退二郎先生

その1 『犬のバルボッシュ』（上）

1982（昭和57）年2月13日の夕刻、パリ10区ボン・ヌーベルの韓国料理「竹園」で私たちが食事をはじめたころ、日本人の男性ふたりが店に入ってきて、となりのテーブルに案内されました。ひとりは、天沢退二郎先生（1936～2023年）でした。

この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとらえ直しも試みます。ご愛読ください。

<これまでの連載はこちらから>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta.html

《6》 富安陽子 I I C L O ストーリーコンペ 第3回

ストーリーコンペ 第3回（キーワード「トビウオ」「くつ下」、7/31締切）の応募作品39編の中から、富安陽子理事長が選んだ5作品を発表します。

- A「恐竜がジャンプする」
- B「じっちゃんの海にかかる橋」
- C「セールスマンのデルタさん」
- D「トビウオ姫とくつ下王子」
- E「なきすな駅のベンチ」

こちら↓に作品を公開しています。作者名は伏せています。

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/storycompe.html#192_5sakuhin

※ご自分の作品が選ばれた場合、結果発表までは公表をお控えください。

読んで、いちばんおもしろいと思った作品にぜひ投票してください！

投票はどなたでもしていただけます。（1人1作品のみ）

◇投票期間：8月20日（木）～9月30日（水）

投票はこちらから→ <https://forms.gle/STMPm7vwRuaSeUr9>

みなさんの投票を集計し、10月20日発行のメールマガジン N0.194 で、上位2作品を発表します。同じ条件で書いた、富安陽子理事長の作品も公開します。お楽しみに！！

<詳細はこちらをご覧ください>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/storycompe.html

■-----■

【3】全国のイベント紹介

■-----■

●JBBY 子どもの本の翻訳フォーラム「平和を考える－翻訳家の立場から」

講師：愛甲恵子（ペルシャ語）、宇野和美（スペイン語）、野沢佳織（英語）

日時：9月6日（日） 14：00～16：30

場所：オンライン（見逃し配信あり） ※有料、要申し込み

主催：（一財）日本国際児童図書評議会（JBBY）

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

■-----■

【4】プレゼント

■-----■

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『もりもりの出版社』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ ご応募ください。

応募フォーム⇒ <https://forms.gle/uL2TpNhMEYWJpnQ9A>

締切は9月10日（木）、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

—「—」—「—」—「—」—「—」—「—」—「—」—「—」—

近年の夏の厳しい暑さには参ってしまいます。そんな中、最近購入した晴雨兼用の傘がとても重宝しています。夏の高校野球は、「ドームじゃダメなの？」との声も聞こえてくるほどの暑さです。未来の環境のために、できることを一つずつしていきたいと思っています。（T A）

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いいたします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp

